

小学生以前の英語学習の持つ 高校時における情意的効果の探索的研究

長沼 君主
(東京外国語大学)

森下 みゆき
(ベネッセコーポレーション)

研究目的

小学校における英語活動では「情意の育成」にまずは重きがおかれるが、そのようにして育成された「英語が好き」という感情は、その後の中学や高校での学習へどのような影響を与えるのか？

そのような感情は学習を進めていく中でどのように変化をしていくのか



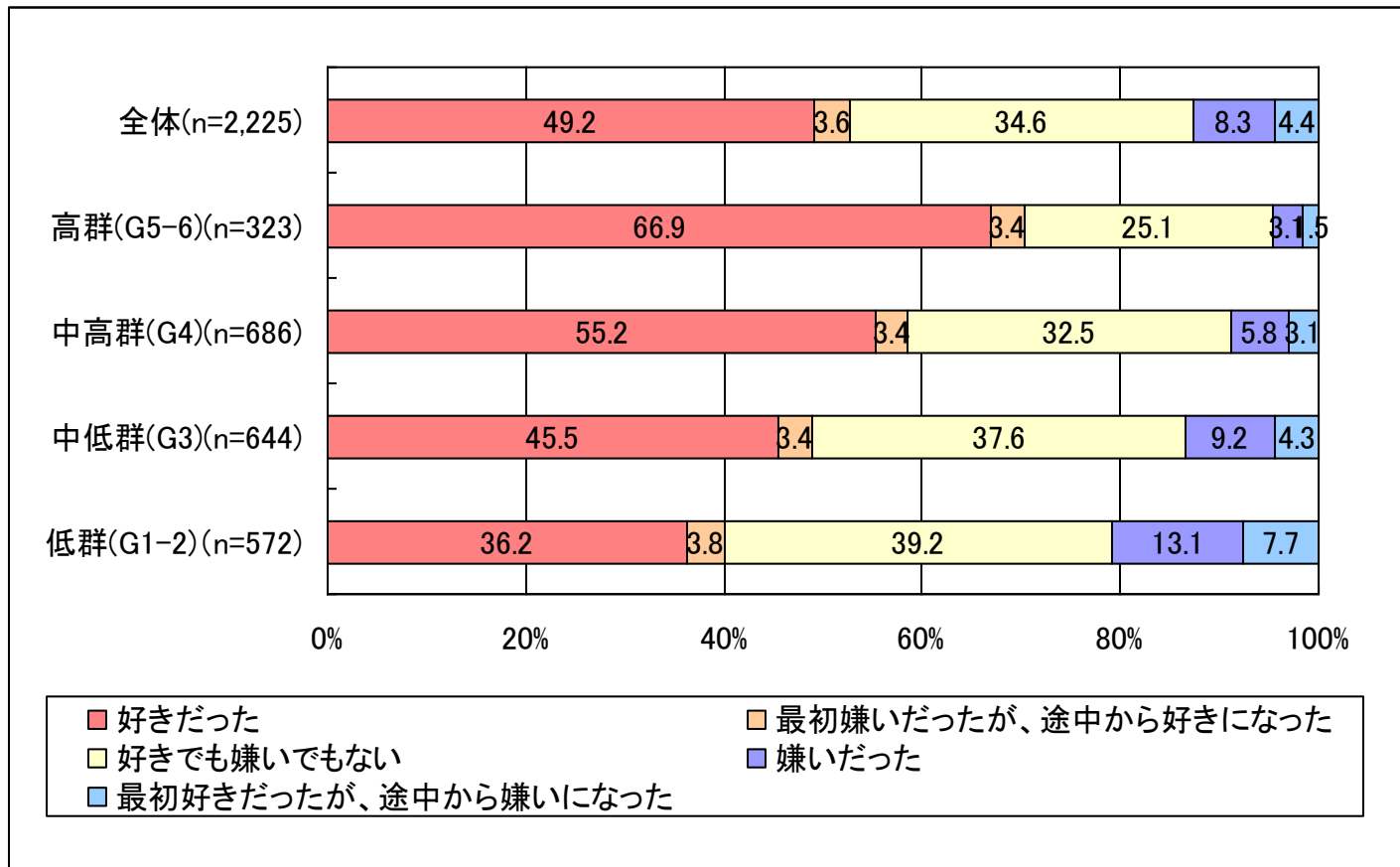
「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」の日本調査データ

小中高での情意的変化と動機づけについての高校生を対象とした振り返り調査

調査対象：高校1年生2,005名、高校2年生1,495名の合計3,700名

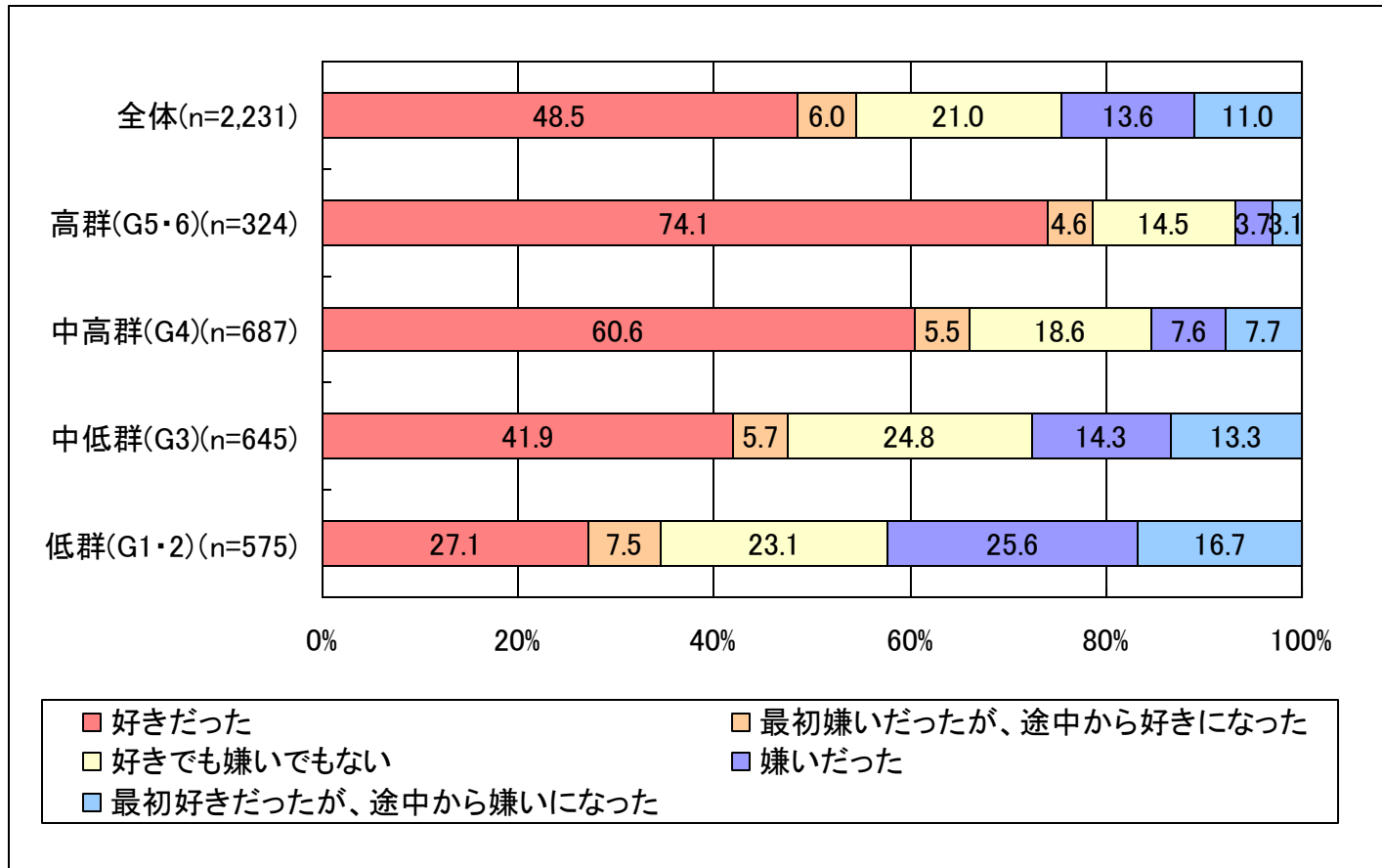
GTEC for STUDENTSのグレードより、能力層別に高群(G5-6)、中高群(G4)、中低群(G3)、低群(G1-2)に分けて分析

小学生段階での情意変化(経験者:60.1%)



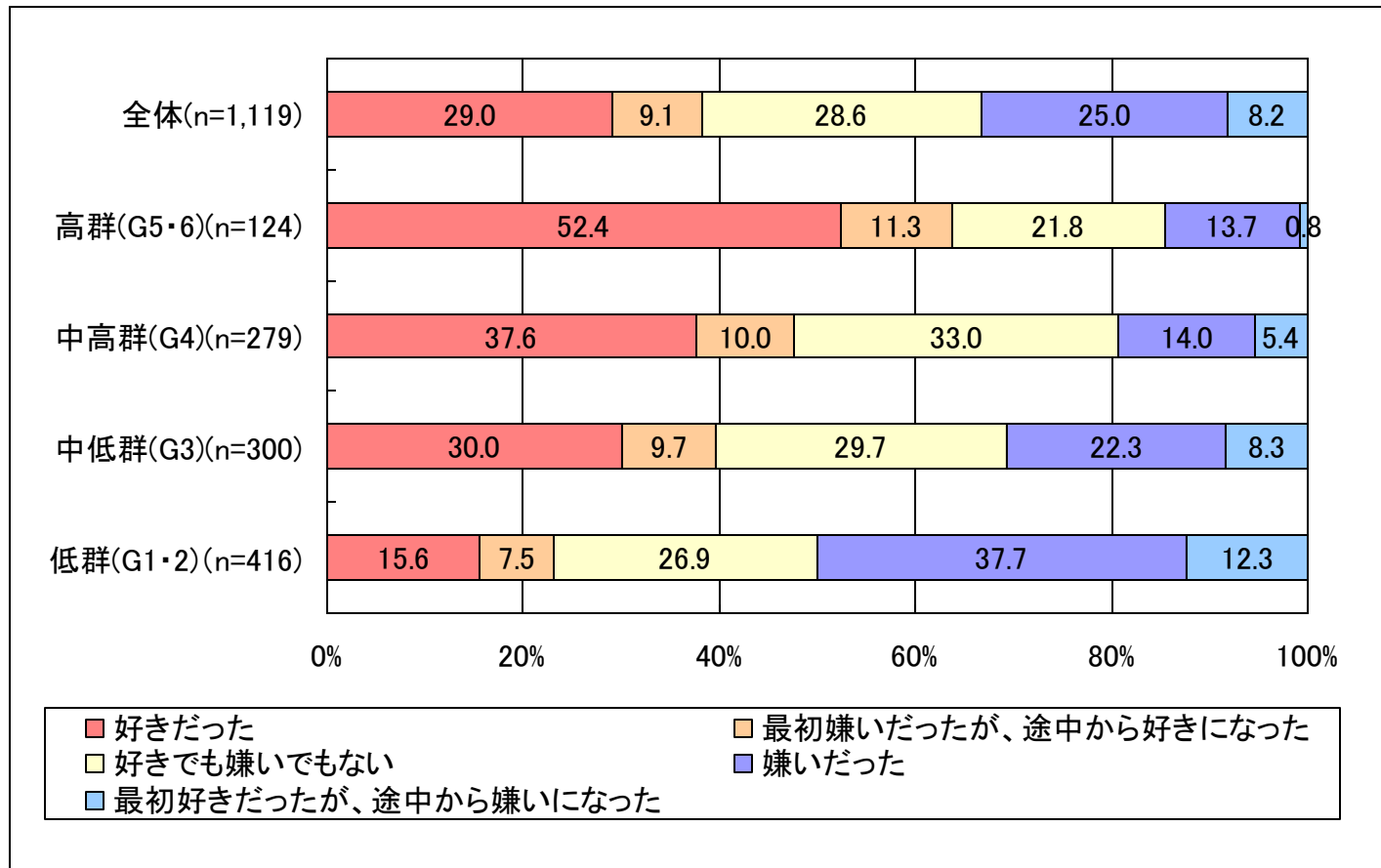
全体の半数近くが英語を「好き」と回答、「嫌い」と答えた学習者は少ない

中学生段階での情意変化(経験群)



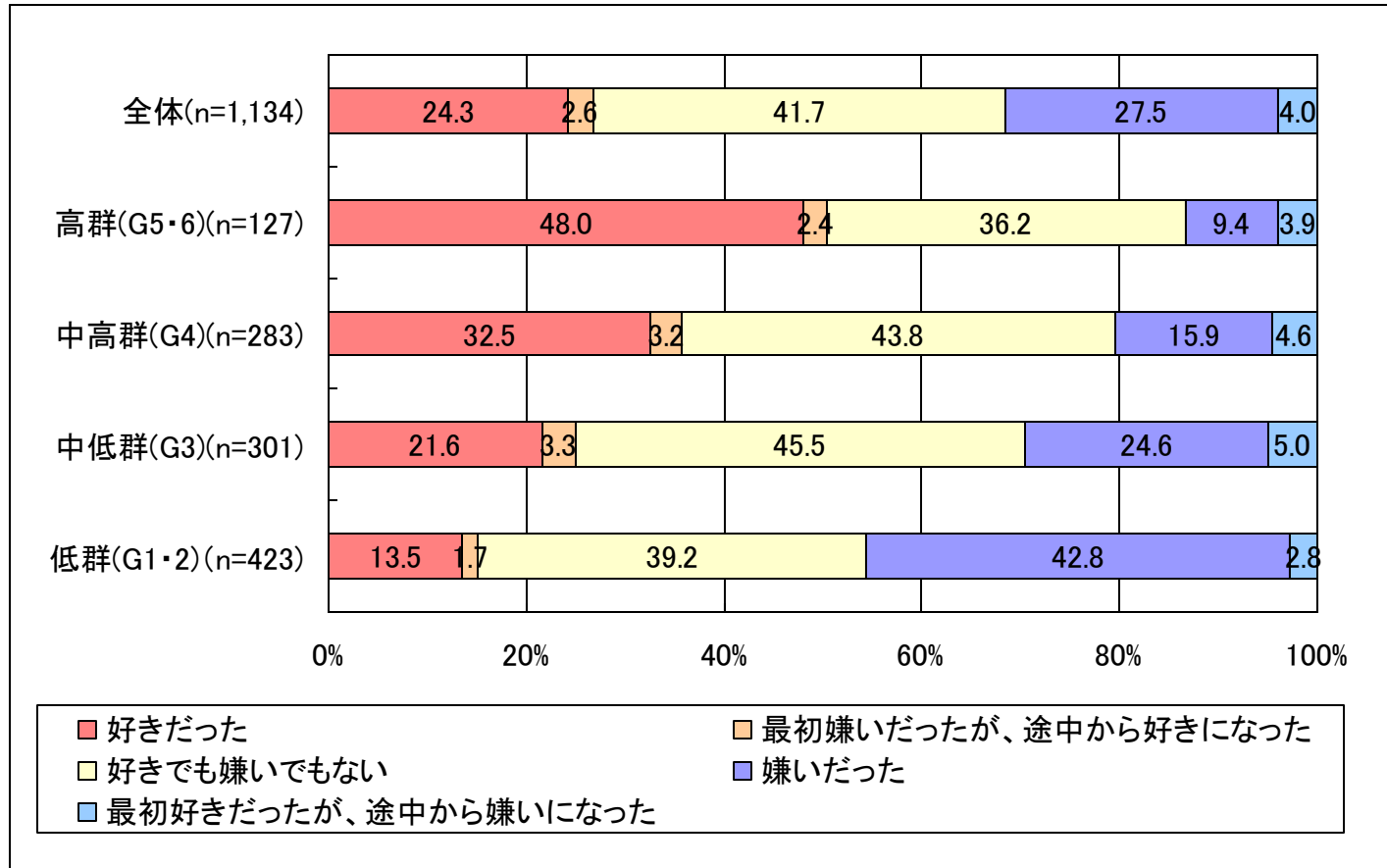
経験者層では「好き」と答えた学習者が同程度だが、「嫌い」が増えている

中学生段階での情意変化(非経験群)



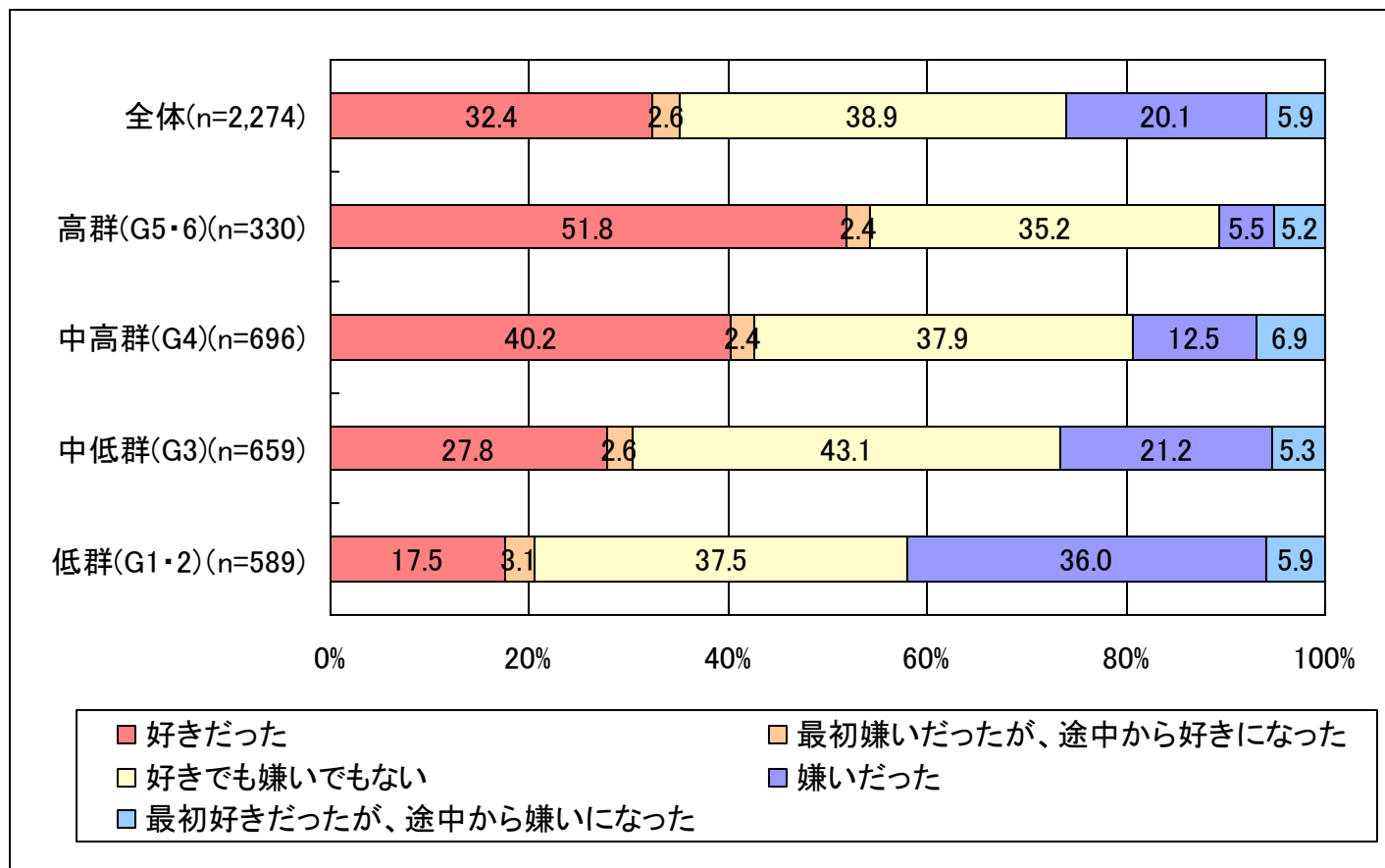
非経験者層では「好き」と答えた学習者が少なく、「嫌い」も同程度

高校生段階での情意変化(経験群)



経験者層でも「好き」と答えた学習者が減少、「嫌い」が増えている

高校生段階での情意変化(非経験群)

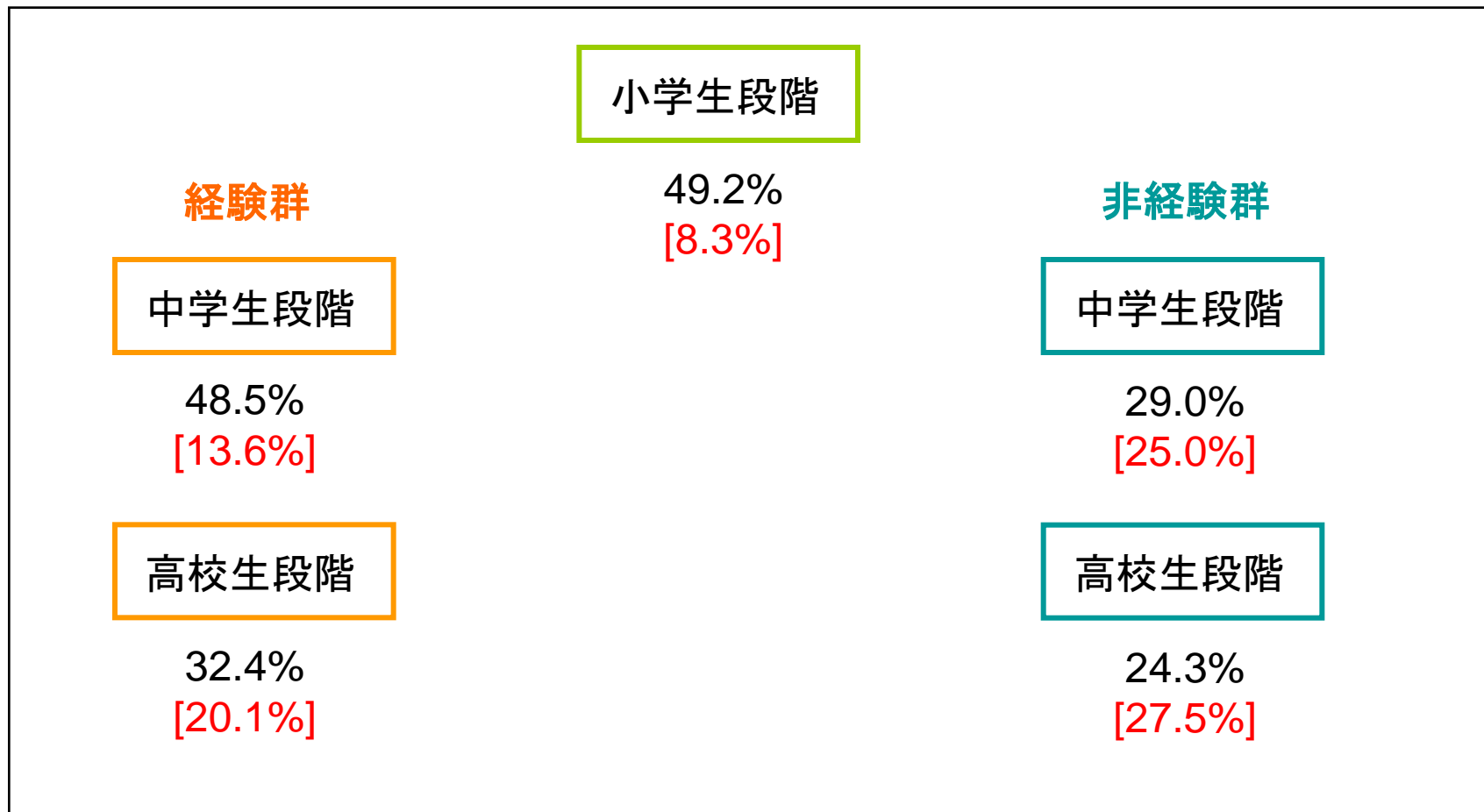


非経験者層では「好き」と答えた学習者と比べ、「嫌い」が上回っている

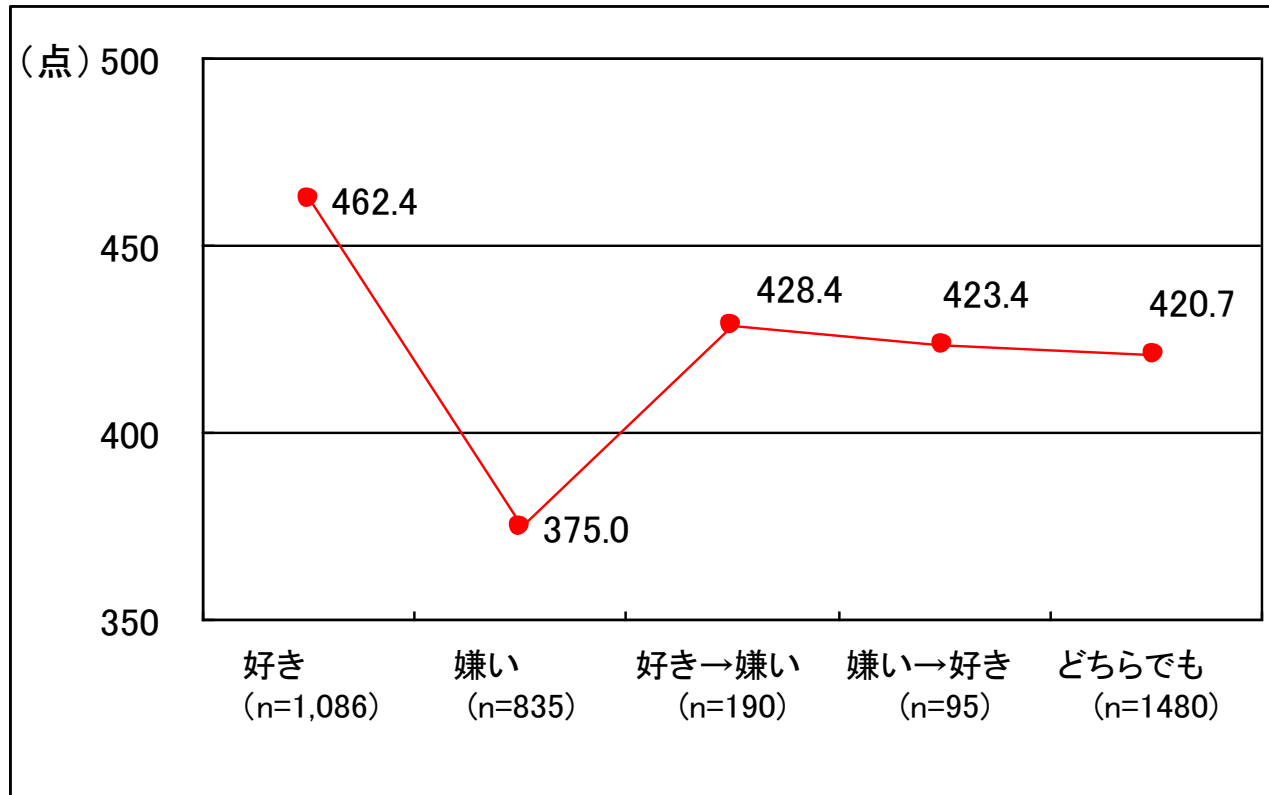
小中高での情意変化まとめ

「最初から好き」と答えた回答比率

(カッコ内は「最初から嫌い」)



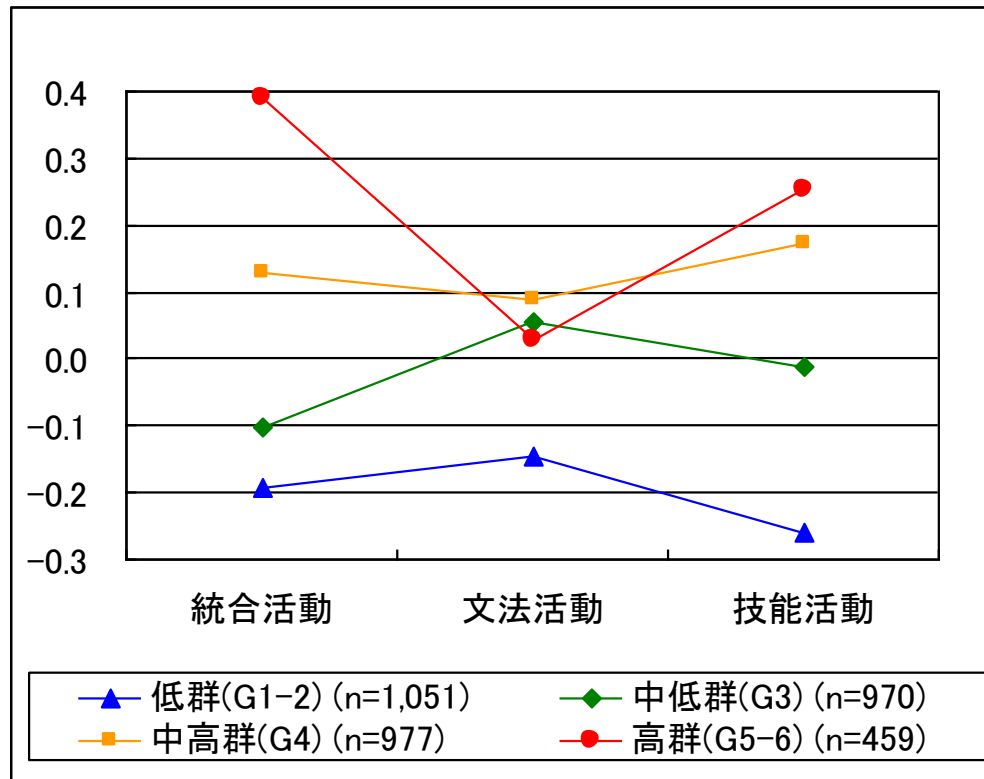
高校生段階での情意×能力



GTEC for STUDENTSスコア平均

「好き→嫌い」と「嫌い→好き」は「どちらでもない」と同程度の中間的スコア

高校生段階での教室内活動認知 × 能力層

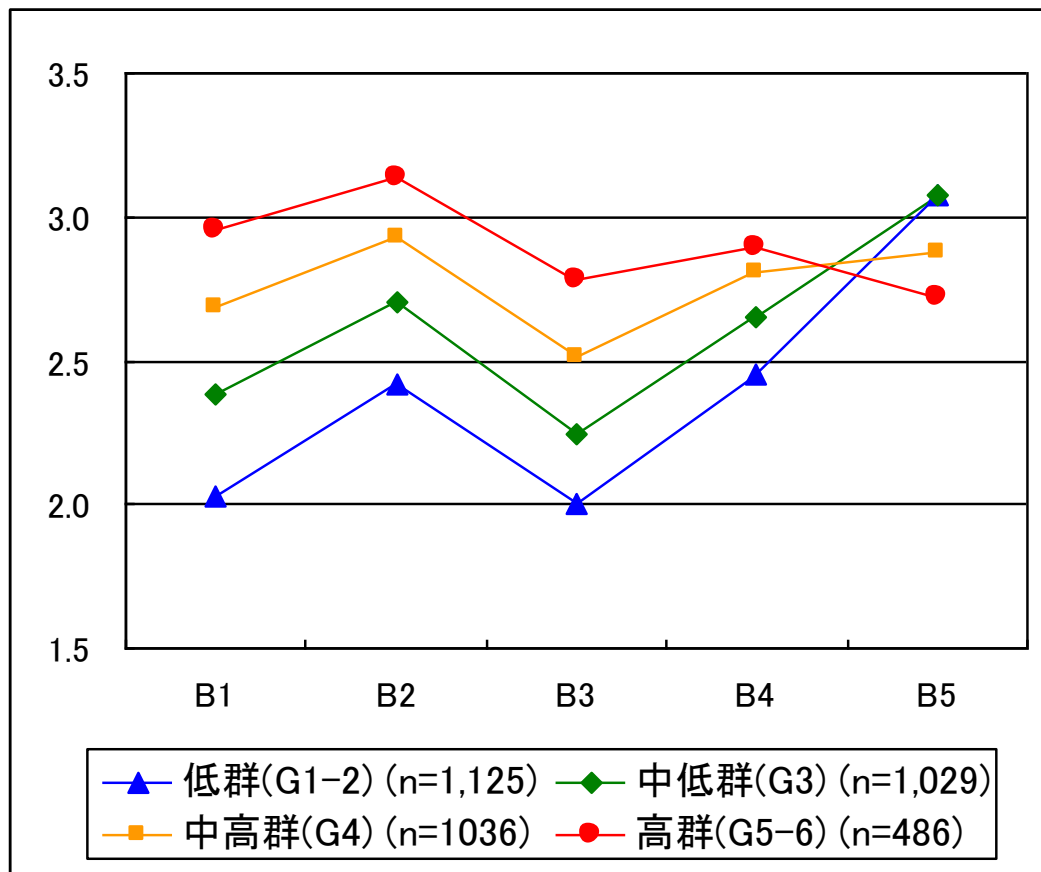


「統合活動」:「様々な話題について、英語で問題点や原因などを話し合ったり、賛成と反対の立場から議論したりする」、「読んだり聞いたりした内容についての自分の考えを整理して英語で書く」といった、情報をもとに何かを考えてそれをまとめて伝達するといった活動

「文法活動」:、「文法や語法に注意して正しく英語で書く」、「英文和訳をする」といった、主に文法をベースとした理解や産出の活動

「技能活動」:「音読などによって英語を流暢に声に出す練習をする」、「英語のリズムやイントネーションに注意しながら発音を練習する」といった主に口頭での技能に重きをおいたスキルトレーニングの活動

高校生段階での英語学習動機×能力層



B1 友好動機 B2 興味動機[一般文化] B3 興味動機[言語文化]
B4 社会的承認動機 B5 状況必然動機

高校生段階での能力と教室活動と動機づけ

高校生段階で英語が「好き」な学習者と「嫌い」な学習者では能力に大きな差があり、「途中から好き」になった学習者は、「どちらでもない」と答えている学習者と同程度であることから、高校入学前の情意が重要

英語力の高い学習者は「統合的活動」の経験比率が高く、中高群と中低群を分けるのは、「統合的活動」と「技能的活動」の比率の高さであり、低群ではいずれにおいても低い。ただし、高スコア層でも文法活動を行っている

高スコア層では英語を使ってコミュニケーションを取りたいといった友好動機や言語や文化への興味動機が高い値を示しているのに対して、低スコア層になるにしたがって、それらの動機は低くなり、映画や音楽などへの一般文化への興味動機や社会に出て役に立つからといった功利的な動機が主な動機となり、仕方がないからやっているといった義務的動機が高くなる傾向

小学生以前の英語学習でも表層的な楽しみだけでなく、より深い言葉を学ぶこと自体の面白さや文化的興味をいかに育成していけるか

Thank You Very Much



お問い合わせは・・・

n.naganuma@tufs.ac.jp

東アジア高校英語教育調査報告書は・・・

<http://benesse.jp/berd/data/>